

漆黒鴉学園2

第一章 魅惑的な声

一話 無関係

そこは漆黒鴉学園しつこくからすがくえんの中庭の隅。ほとんどの生徒が既に下校している今、白金髪プラチナブロンドの容姿端麗な青年が、黒髪の男子生徒の首を絞めている光景を目撃した者はいなかった。

「うー、ほんとーに、俺は犯人を見てません。うー、俺が駆け付けた時にはもう宮崎みやざきさんは階段で倒れてました、げほっ」

苦しげに呻うめきながら生徒会庶務の黒巢漆くろすななは、自分の首を絞める青年に告げる。

「君には、彼女が一人の時は見張っているよう頼んだはずですよ？ 君が不用意に現場に踏み込んだせいで、彼女を階段から突き落とした犯人の匂いが掻き消されてしまいましたよ」

吸血鬼の容赦ない力で首を締め上げてくる青年——ヴィンセント・ジェン・シルベルは、冷たい青い瞳で黒巢を見据えた。その眼差しは、寵愛ちようあいする宮崎音恋ねれんには決して向けないものだ。

彼女に嫌がらせをしていた犯人が、彼女を階段から突き落として怪我をさせた。一歩間違えれば命も危うかった。その犯人に対するヴィンセントの怒りを黒巢はぶつけられていた。

「うー、宮崎さんは、直前まで屋上で橙先輩だいだい先輩といたんですよ。見張ってたら橙先輩に追い払われて……うー、そのすぐあとに事件が起きたんですよ。俺は匂いとかわかんないので、そこまで考えがいなくてですねえ……うー……怒るなら橙先輩を怒ってくださいよ……」

黒巢は罪を橙に押し付けた。あながち嘘ではない。

煩く吠える橙を避けて校内に戻ってみれば、音恋は犯人といた。だから黒巢は音恋が犯人を挑発し階段から突き落とされる一部始終を見ていたのだが、それをヴァインセントに告げるつもりはない。吸血鬼であるヴァインセントに嘘は通用しないが、首を締め付けられて上手く呼吸ができない今、嘘による脈の乱れは相手には伝わらない。

彼は黒巢の嘘に気付くことなく、屋上を見上げる。屋上ではまだ橙が昼寝をしているはずだ。

「もし次があったら、ただじゃ済みませんよ」

「……絶対に怪我させません」

冷たく見下ろすヴァインセントにそう誓うと、やっと首を解放されて黒巢は一息ついた。

「ヴァインセントせんせえ」

屋上に向かうヴァインセントに声をかける。

「宮崎さんに、秘密を明かしたんですかー？」

「ええ。試験が終わったあとに思っていました、彼女は私の正体に薄々気が付いていましたし、もう隠す必要はないでしょう」

ヴァインセントの口元に、自然と笑みが浮かぶ。

黒巢はそんなヴァインセントの顔を見て、うんざりしたような表情をする。

「犯人はどうするんですかー？ 猶予ゆうよをあげるとか話してみたいですけど」

「猶予を与えますよ。音恋さんは犯人が考えを改めたら許すつもりですから」

「宮崎さんが許したら、処罰なしですか？」

「まさか」

ヴァインセントは冷笑を浮かべて黒巢を振り返った。

「初めから許すつもりなどありません」

氷のような青い瞳孔が鋭く突る。モニスターの頂点に立つ純血の吸血鬼は、ただの人間に対してもまったく容赦はしないようだ。それはひとえに、彼が寵愛ちようあいする少女に対する庇護欲ひごよくと独占欲からくるものだろう。

ヴァインセントは今度こそ、その場から音もなく消えた。完全に気配が消えたのを確認すると、黒巢もすぐに移動する。保健室の中が覗ける木の枝に座り、窓の向こうの会話に耳を澄ませる。そこには階段から落ちたあと、怪我の治療のために運び込まれた宮崎音恋がいる。黒巢は聞こえてくる会話の内容に、不機嫌そうに顔をしかめた。

「普通がいい？ ぶあつかじゃねーの。無関係を貫くなんて不可能なんだよ」

黒巢は木の枝から飛び降りると、保健室の窓を見てニヤリ、と笑った。

「神様が決めた運命には逆らえないんだよ——宮崎音恋」

漆黒鴉学園高等部の保健室は静まり返っていた。

私、宮崎音恋はちらりと、目の前に立ち尽くす養護教諭の笹川仁先生に目を向ける。癖のある茶髪と無精髭のハンサムな白衣の先生は、啞然としていた。

私の担任教師であるヴィンセント先生が、自分の正体が吸血鬼であるということを暴露して去って行ったからだ。

けれど私は、ヴィンセント先生に暴露される前から、彼が吸血鬼であると知っていた。それどころか、もっと大きな秘密も知っている。

創立六十六年になるこの漆黒鴉学園には、ある秘密があった。生徒会メンバー全員がモンスターという秘密。彼らは正体を隠し、人間の姿で人間と共に学園生活を送っている。知っているのは、ごく一部の関係者だけ。その秘密を、私は最初から知っているのだ。

なぜなら、私には前世の記憶がある。なんとこの世界は、私が前世でプレイしていた乙女ゲームの世界だった。学園の秘密を知ったヒロインがモンスターと禁断の恋を繰り広げるという恋愛ゲーム。そこに自分が、脇役の宮崎音恋として生まれ変わっていたことに、私は高等部の入学式の最中に気が付いたのだ。

けれど、たとえこの世界が乙女ゲームの世界だったとしても、私は普通に自分の人生を生きたい。

前世で早くに病死した私の願いはただそれだけなのに、何故か人生がシナリオに吞まれていく。

もとのゲームシナリオに、脇役の宮崎音恋が学園の秘密を知るような展開はないはずなのに。

第一、ゲームで悪役として登場した純血の吸血鬼ヴィンセント・ジェン・シルベルが、教師になる展開なんてなかった。まして、脇役に好意を寄せるなんてあるはずもない。

私に前世の記憶があるせいで、イレギュラーが発生しているのかもしれない。けれど、これ以上イレギュラーによって、本来のゲームヒロインであり、私の親友でもある姫宮桜子の幸せを邪魔するわけにはいかない。

私は自分の願いと桜子の幸せのために、ゲームの当事者にはなりたくない。それなのに、麗しい担任教師が自分の正体を隠すことをやめてしまったせいで、私は今、窮地に立たされていた。

「びんすせんせ、なにいつてるんでしょうね」

「棒読みだ！」

「私には、何を言っているかわかりません」

「気付いてんだな？ 気付いちやっただな、音恋ちゃん」

「何も聞こえません」

「なんでそういうとこだけ子どもなんだっ！」

私は耳を塞いでそっぽを向く。なんとか誤魔化すことはできないかと、パニックで止まりそんな思考を必死に働かせた。私はどうにかして、この場を切り抜けなければならない。

「私にはヴィンス先生が何を言っているのか、さっぱりです。理解できません」

「往生際悪いぞ。テスト直前で足掻くタイプだろ」

「違います。ところで笹川先生」

「わざわざしく話題を変えるな」

笹川先生は、再び私と向き合うように椅子に座る。ベッドに座っていた私は、笹川先生を真つ直ぐ見つめて口を開いた。

「養護教諭の自覚が足りないと思います」

「なんだいきなり」

「せめて勤務中は喫煙を控えるべきです。喫煙しない人間は煙草の煙と匂いに敏感です。養護教諭が保健室で生徒に不快感を与えるのはいかがなものかと」

「す、すまない……」

きつい口調で言えば、笹川先生は口元を引きつらせて自分の白衣の匂いを確認した。

「そもそも煙草は人体に害を及ぼすものです。生徒に示しがつきませんよ。二十歳過ぎたら煙草を勧めるつもりですか？ それでも心身の健康を司る養護教諭ですか？」

「これでも養護教諭ですが、以後気を付けます……」

「気を付けるだけですか？ 禁煙を誓うくらいのことをしてほしいのですが」

「なんでそこまで誓わなきゃならないんだい、音恋ちゃん」

笹川先生はしおらしく項垂れたけれど、私が求める言葉はそれではない。禁煙の二文字です。いかに煙草が有害か、罪悪感を刺激する言葉を選び淡々とした口調で延々と責め続ければ、みる

みる青ざめた笹川先生が「禁煙するっ!! 禁煙しますっ!!」と懷から煙草の箱を取り出してゴミ箱に投げ入れた。ナイスシュート。

「俺、なんか音恋ちゃんを怒らせることしたか……？ 敵意剥き出しだな、おい」

「ただの煙草嫌いです」

「はは、そういえば女の子の煙草嫌いは生理的に受け付けられないって理由もあるらしいぜ」

「そうでしたか」

少しでも寿命を伸ばしたい私からしたら、健康を損なう恐れのあるものは、嫌って当然でしょう。他人のせいで私の寿命が削られるなんて、まっぴら御免です。

「そんな風に犯人に噛み付いたから、階段から突き落とされたのかい？」

そう言いながら、笹川先生は私の手首の擦り傷を消毒し始める。

「いいえ。突き落とされたあとに言ったら、悔しそうな顔をして去って行きました」

「なに言っただよ……」

「ただ、貴女がやっていることは間違っていると……惨めだと言って笑っただけです」

「音恋ちゃん、怖いぞ」

「そうですね……もう少しオブラートに包んで貶すべきでした」

「待て、言っていることがすげえ怖いぞ！」

ツツコミがいると、ついボケをかましたくなりますよね。こういうやり取り、好きです。

「笹川先生みたいに、考え直してくれるといいのですがね……」

「……随分と相手を気にかけてるんだな。音恋ちゃんは
そう見えますか？」

私は、手当てを終えた笹川先生を見上げる。

「笹川先生みたいに、やり直すチャンスを与えてあげたいじゃないですか」

「俺はチャンスをいただいたのかい……」

笹川先生は苦笑した。

「犯人もチャンスを掴めればいいな」

ニツ、と笑ってみせると笹川先生はライターをゴミ箱に投げ入れる。またナイスシュート。ここは笹川先生をかつこいと思うシーンかもしれませんが……

「笹川先生、ゴミはちゃんと分別してください」

「……はい」

かつこつけたところ悪いですが、ライターは燃えるゴミに入れてはいけません。

萎れた背中の笹川先生はゴミ箱に向かい、ライターを拾った。

「犯人がチャンス掴まなきゃ、吸血鬼にやられちゃうよな！」

笹川先生は勢いよく振り返ると、大人げなく笑った。

私にしては珍しく長々と喋って、話をヴィンス先生の正体から逸らしたというのに。私の努力を一瞬で水の泡にした笹川先生を、恨めしく見上げる。

「音恋ちゃんはほんと、肝が据わってんなあ。階段から突き落とされようが、担任が吸血鬼だろう

が、今までと変わらず冷静でいられるなんて、すごいな」

笹川先生はやれやれと肩を竦めると、私の目の前の椅子まで戻ってきた。

この人相手に言い逃れはできそうにない。今でこそ学園の養護教諭だが、以前は最強のハンターだった笹川先生を前に、私は密かに緊張する。下手をすると、私の人生が劇的に変わってしまうかもしれない瞬間に、ゴクリと唾を呑み込んだ。

けれども、私が知っているのはヴィンス先生の正体だけだと思われている。

私がヴィンス先生以外にもモンスターが存在するという、この学園の秘密を知っていることまでは気付かれていない。ならば、開き直ってヴィンス先生の正体を知ったことだけを認めよう。

「冷静なのは私の取り柄です。ヴィンス先生には、初めて会った時に血を舐められましたし、正体に繋がるようなヒントを出されたりしたので、そうかもしれないと思っていました。では本当にヴィンス先生は吸血鬼なのですね」

淡淡といつも通りに言葉を並べる。嘘をつくコツは、それを嘘だと思わないこと。口から出た言葉があたかも本心であるかのように言う。

僅かな心音や呼吸の乱れを聞き逃さない吸血鬼と違って、人間相手なら通じるはずだ。

「因みに俺は人間だぜ」

私の言葉に、そう言って笑う笹川先生は嘘を信じたようだ。

「んで？ 吸血鬼をどう思うよ、音恋ちゃん」

「どう、と言いますと？」

実は吸血鬼の他にも……、と言い出されなかったことに、私は内心ほっとする。

「吸血鬼、つまりは不老不死だ。なりたいたいと思うかい？　ヴァインセント先生の血は、音恋ちゃん
の健康を守ることもできるし、怪我だって治せる万能薬だ。人間がその血を体内に残したまま死ぬ
と……吸血鬼になれるんだぜ。音恋ちゃんは、吸血鬼になりたいかい？」

頬杖をついて笹川先生は薄く笑った。

吸血鬼の血を体内に残したまま死ぬと、吸血鬼になる。しかし大半は自我のないグールと呼ばれ
る怪物になるのだ。そのことを、ハンターである笹川先生は当然知っているはず。

何故こんな質問をするのだろうか。もしかして私を試している？

「……私は人並みに生きたいです」

「人並みに？」

「はい、八十歳まで生きることが私の人生の目標です」

そう答えると、笹川先生はぼくりと目を丸めた。

「おかしいですか？」

「いや……いいんじゃない？　ちょっと平凡な気もするが」

「平凡がいいです。普通がいいのです。その方が長生きできるじゃないですか。私は長生きがし
たいのです」

ただ長生きがしたい。永遠の命は望まない。ただ人並みに生きたいだけだ。

「それって、ヴァインセント先生の気持ちはお断りって意味かい？」

笹川先生は率直に問う。彼の目から見ても、ヴァインス先生の気持ちは一目瞭然いちりょうぜんなのでしょう
か。

私は拒絶を込めて頷く。

ゲームの彼は悲しみに狂った悪役だったけれど、この世界のヴァインス先生はとてもいい先生だ
と思う。私を守るために誰かを傷付けてほしくない。優しくしてくれる彼が苦しむ姿は見たくない。
だからといって人並みに生きたいという目標がある限り、吸血鬼であるヴァインス先生の気持ちは
受け入れられないし、受け入れるつもりもない。ゲームのシナリオとは関係ない普通の人生を送る
ために、私の考えは揺るがない。

「そっかそっか」

そう言って、大きな手で私の頭をポンポンと撫でる笹川先生の顔には、満面の笑みが浮かんで
いる。

「普通が一番だ。長く生きたいならアイツとは仲良くしない方がいい」

私に顔を近づけて、誰にも聞こえないように耳元でそつと囁く。至近距離で煙草の匂いがした。

「煙草の煙と同じで、アイツは有害だ。気を付けろよ……他人のせいで死にたくないもんな？」

私から身体を離すと、笹川先生はニコリと笑ってみせた。

笹川先生はハンターでありながら、モンスターにも理解があると思っていた。だから有害だと言
われて、なんだか意外に感じる。普通の人生を望む生徒を思つての、優しい忠告なのだろうか。

「ネレンー！」

そこで明るい声を上げながら、親友のサクラが保健室に飛び込んできた。栗色の髪を舞い上げて

私の隣に勢いよく座る。

乙女ゲームのヒロイン、姫宮桜子。天真爛漫な彼女は誰にでも明るい笑顔で接する子。私が密かに憧れている女の子だ。

「あたし……ネレンのことが好きかもしれない人と会っちゃった！」

「……はい？」

ブラウンの瞳を輝かせて私の手を握り締めてくるサクラを、私はポカーンとして見つめる。

瞬きを三つしてから思い出した。そういえば先程、風紀委員の草薙先輩と二人で庭園にいたけど、まさか草薙先輩のことを言っているのでしょうか。

「なに言っているの、サクラ。私を好きになる男子なんていないよ」

「いるよ!! あの人絶対ネレンが好きだよ！」

断言しました。なにを根拠にそんなことを言い切れるのでしょうか。

「ネレンは自分を下降評価しすぎっ!! あたしが男なら絶対ネレンを好きになるもん！」

「下降評価ではなく、過小評価ね」

私の自己評価は下降してません。

笹川先生はお腹と口を押さえて笑いを堪えていた。

「いい人みたいだから今度話しかけてみよう? あたしも一緒に行つてあげるから！」

「遠慮します」

「ネレン! 勉強ばっかりしてちゃだめだよ! 恋しよ恋し！」

「勉強も大事だよ。サクラは、テスト勉強すべきだよ」

「うん、決めた! あたし、ネレンと先輩を応援するから！」

桜子さん、私の話を聞いてください。

あらぬ方向にサクラの思考が働いて、暴走を始めてしまった。

私はサクラにゲームのシナリオのような恋愛をしてほしい。それはサクラの幸せに繋がるからだ。

姫宮桜子は、トラウマにより男性と触れ合えない。けれど、恋愛をすることによって、そのトラウマを克服することができるのだ。

そのためにも、私の恋愛より、自分の恋愛を気にしてほしいのだけれど。

そう思っていると、目の前の笹川先生が、ついに堪えきれず笑い声を響かせ、保健室から出て行きました。

三話 中間試験

中間試験三日前の朝。私は普段より三十分早く、寮のラウンジに行った。この時間に朝食をとる生徒はあまりいないため、ラウンジはがらんと空いていた。

私は朝食のトレイを持って、定位置となった入り口近くの窓際の席に座る。そこには、いつも笑顔で迎えてくれる桃塚先輩の姿はない。

桃塚星司先輩は、愛くるしい容姿で女子生徒に人気のある、この学園の生徒会長だ。ゲームでは

ヒロインである桜子の攻略対象のひとりで、正体は九尾の妖狐。

私と朝食をとるようになったきっかけは、桃塚先輩が私から桜子の情報を聞き出そうしたことだ
けど、いつの間にか一緒に朝食をとるのが日常となっていた。

しかしそのことで、私は桃塚先輩に好意を寄せる花園麗子先輩に嫉妬され、嫌がらせを受けるよ
うになった。花園先輩はゲームヒロインのライバルキャラであり、本来なら嫉妬の矛先はサクラに
向けられるはずだった。それがイレギュラーで私に。

花園先輩が勘違いから私をどう思おうと別にどうでもいい。だけど、つい先日、激高した花園先
輩に階段から突き落とされてしまった。そのせいで、ヴィンス先生が暴走し、私はますますゲーム
の当事者に近付いてしまったのだが。

花園さんを守る義理はないけれど、ヴィンス先生には誰も傷付けてほしくないから犯人の名前は
言わない。彼女が考え直して嫌がらせを止め、桃塚先輩に告白する気になってくれるのならそれが
一番いい。そのためにも私はしばらく桃塚先輩の近くにいない方がいい。私がいなくとも恋敵は多
いけれど、そこまで世話をする気はないです。

三十分早く朝食をとった分、朝の時間が三十分空いたので、その時間を使って試験勉強をした。
学校に登校して靴箱を覗くと、上履きの中に画鋲は入っていないかった。

それから試験までの間に、花園さんからの嫌がらせはなかった。

おかげで私は、しっかりと勉強に集中できて自信满满で中間試験を迎えることができた。手応えあ

り。結果発表の来週が楽しみです。

浮かれていたのもつかの間、約束を破って怪我をした私への罰であるヴィンス先生との課外授業
を、来週やると宣言された。

「テストも終わったことですし、小説の続きを忘れず読んでくださいね」

いつもの庭園でのランチタイムに、さらりと言われた台詞に一時停止する。すっかり記憶の彼方
に追いやっていた存在が舞い戻ってきてしまった。私は返答に困って俯く。

「あの小説は実話をもとにして書かれた物語なのです。必ず最後まで読んでください。私を避ける
のは、それからでも遅くないですよ」

二人きりのランチタイム。普段通りの穏やかな口調で、ヴィンス先生はそう言った。

私が避けたがっていることは、しっかりと伝わっていたようです。

返事をしない私に、気にした素振りも見せずヴィンス先生は話題を変えた。

「そういえば、来月には体育祭がありますね」

「……ですね」

六月の大きな学校行事は体育祭。つまりは私の死亡フラグです。ま、大袈裟な言い方ですがね。
体育祭にはまったく言っていないほどいい思い出がない。

中学の体育祭は三年連続保健室に運ばれて早退した。一年の時は熱中症、二年の時は転倒、三年
の時は再び熱中症。

六月に入ると体育祭の練習三昧の日々が始まるから、今から気が重くて仕方ない。

「そんなに嫌な顔をしないでください。音恋さんが望むなら多めに入れておきますよ？」

「お断りします。……顔に出ていましたか？」

クスリと笑うヴィンス先生が、誘惑するけれど負けません。純血の吸血鬼の血で身体能力を上げなくても結構です。

顔に出しているつもりはなかったのに、指摘されて思わず頬を両手で押さえる。

「よく見ればわかりますよ。僅かですが、感情が出ています。音恋さんの表情は、見ていて飽きません」

優雅に微笑んでみせるヴィンス先生。そういう風に見ていたのか。全然気付かなかった。

「ずっと見つめていたいほどです」

青い瞳の優しい眼差しが私に向けられる。思わず目を伏せた。ヴィンス先生はただ笑うだけ。

私は目を伏せたまま、ヴィンス先生のお弁当を口に運んだ。

どんなにヴィンス先生が私に優しさを注いでくれても、私はその想いを受け入れられない。

『役を演じるならきっちり演じろよ、ぶあーか！』

以前黒巢くんに言われた言葉が脳裏を過った。

試験終了から数日。学園の正面玄関にある掲示板に、中間試験の結果が一斉に張り出された。

「おい、まじかよ。この一年の一位」

「すげえ高得点じゃん」

登校してすぐ、私は順位を確認してきた生徒の間を苦勞して進み、男子生徒が指差す方を見る。

一年生の一位の欄には――私の名前があった。私の中に喜びが込みあがる。けれども……総合点数を見た瞬間、その気持ちがきゅつと萎む。

今回の中間試験は、全七教科。私の名前の下にある総合点数は、六九八点。

返された答案を見てわかつてはいたけれど、やっぱり悔しい。あと二点。あと二点！

数学で一問間違えたせいで、目標の全教科満点を達成できなかった。物凄く悔しい。

「宮崎って誰？」

「さあ？」

「俺知ってる。一年の姫宮のダチだよ」

「姫宮って、あの一年の美少女か。宮崎も可愛かったりするのか？」

「いや、遠目にしか見たことがないからわかんね」

「どうせガリ勉だろ」

宮崎音恋なら貴方達の目の前にいますが。真後ろで三年生と思われる男子生徒が自分の話をしてるのを聞きつつ、一年の欄を順に見ていく。

そこですぐに違和感に気付く。ゲームのシナリオでは、中間試験の一位は生徒会書記の緑橋くん。今回私が一位をとったなら、緑橋くんは二位のはずなのに、二位には別の人の名前が載っていた。どんどん横に目を動かしていくと、六位に黒巢くんの名前。これはゲームと同じ。そこから少し先に進んだ十位に緑橋くんの名前はあった。

どうしたのだろう、緑橋くん。首を傾げつつ視線を上げて、私は三年生の順位を見た。
 なんと一位には、赤神先輩の名前。これもゲームと違う。副生徒会長長の赤神先輩は会長の桃塚先輩の顔を立てるため、いつも試験は桃塚先輩より下の順位を取る。なのに、今回は赤神先輩が一位で桃塚先輩が二位だ。ヒロインの攻略対象である生徒会メンバーがゲームと違う順位だなんて。これもイレギュラー？ ……ま、いっか。それよりも早く報告しなきゃ。

「……？」

報告しなきゃ、と自然と頭に浮かんできたけれども、一体誰に報告をしようとしたのだろうか。自分の行動にきよんとしてしまふ。両親？ 二人は今パリ旅行中だから連絡はできない。

じゃあ誰に？ 誰に報告をしようとしたんだろう。

誰に報告を、したいんだろう。

張り出された自分の名前を見つめながら、私はただ立ち尽くした。

「勉強教えてネレンー!!」

そんな私に真横からタックルしてきたのは、サクラだ。痛い。

「補習組になっちゃったよお……勉強教えて、ネレンー」

「だからちゃんと勉強した方がいいと言ったでしょ」

「勉強苦手なんだもん、ネレンー教えてくださあい！」

サクラの学力はあまり高くない。この様子だと相当悪かったのだろう。

しかし残念ながら、サクラに勉強を教えるのは私の役目ではない。

「あれが一位の宮崎だつてさ」

「なんか可愛くね？」

「声かけようかな」

サクラが騒ぐものだから、私達は周囲の注目を集めていた。私の話をしていた三年の男子生徒と目が合ったと思ったら、突然冷気が流れてきてその場にいた全員が震え上がる。まるで冷気を避けるようにザッと人ごみが散って道が開けた。その道を通って優雅にヴィンス先生が歩み寄ってくる。ぞろぞろと歩み去っていく生徒達の顔は、心なしか青ざめて見えました。

「姫宮さん、勉強なら生徒会に教えてもらってはいかがですか？」

「え？ 生徒会に、ですか？」

話を聞いていたらしいヴィンス先生が、ナイスな提案をした。

ゲームでは、中間試験の結果が良くなかった主人公は、生徒会に勉強を教えてもらうことになる。橙先輩以外、全員十位以内に入る頭の良さ。彼ら以上に頼もしい相手はいないだろう。

「うん、生徒会に教えてもらうのいいよ。サクラ、生徒会と仲良いんだし」

「えっ!? でも、あたしはネレンに教えてもらいたいの！ ネレン一位だし、一番点とってるし！」

「ごめん。私、人に教えるの苦手だから、あまり役に立てないよ」

自分で言うのもなんだが、私は教師に向いていない。でも黒巢くんは教師志望だから、ゲーム内では教え方が上手かった。緑橋くんも丁寧だし、桃塚先輩は優しい。赤神先輩は消極的だけでも、ぜひ逆ハ！勉強会をやるべきだ。きっとサクラの幸せに繋がる。

「いいよ！ ネレンと一緒にならいい！」

「目的を忘れちゃってるよ、サクラ」

それでは、勉強をやる意味がないよ。

「期末試験に向けて今日から勉強するべきだと思うよ。期末試験も悪い点とると……夏休みは補習三昧だよ？」

「地獄!?」

補習には縁がないから本当かどうかはわからないけど、サクラにその脅しは効いたようで真っ青になった。勉強は不得意で運動が得意なサクラと、運動が不得意で勉強が得意な私は正反対だなぁと改めて思う。

「担任の私からも頼んでおきますよ。姫宮さんの学力向上を、彼らに手伝ってもらいましょう。音恋さんに頼つてはいけませんよ、姫宮さん。貴女に付きつきりで音恋さんの順位が下がってはいけないでしょう」

「うっ……」

「だから生徒会に頼みましょう。彼らが手分けして期末試験まで付きつきりで見てくれるなら大丈夫です」

「……はい」

ヴィンス先生は微笑みを崩さないまま、サクラを諭した。

サクラは私を涙目で見るとしょんぼりと項^{うな}垂れて、とぼとぼと廊下を歩き出す。

なんだか申し訳ない気持ちで一杯です。ごめんね、サクラ。

生徒会との勉強会はサクラのためになる。学力も、たぶん恋愛も、よくなるはずだから。

そう思いながら遠ざかるサクラの後ろ姿を見ると、隣に立つヴィンス先生が歌うような美しい声で言った。

「一位ですね、音恋さん」

見上げたヴィンス先生の視線の先には、一年の順位表。

「よく頑張りましたね」

ヴィンス先生は私の頭の上に手を置くと、そつと優しく撫でてくれた。

「約束の課外授業のあとに、ご褒美を差し上げます。貴女の好きなものです、楽しみにしていてくださいね」

それだけを言うと、ヴィンス先生はサクラのあとを追うように歩き出す。ぽかんとその優雅な背中を見送る。頭の上に残った感触を掌で押さえた。何故か胸の中がふわふわしてる。

ああ、そっか。私は、褒められたかったのか。

私は誰かに努力を認められて褒めてほしかったようです。自然と微笑みが零^{こぼ}れました。

四話 情報流出

見^み目^め麗^{うる}しいメンバーが集まる生徒会室。生徒会長の机に座る桃塚星司は、頼杖^{こば}をついてぼんやり

としていた。心ここにあらずといった状態で、右手に待ったシャープペンで、ぐるぐるとノートに黒丸を書いている。

「もう！ 橙先輩、邪魔するならあっち行つてください！」

「はあ？ ここは生徒会室だぞ！ てめえが勉強する部屋じゃねえ！ つうかそこは俺の机だ！」

桃塚のすぐ横では、生徒会会計の橙空海^{うらみ}の机を占領する桜子と座れない橙がわあぎゃああと口論していた。

「煩い、カイ。お座り」

「うぐっ」

いつもそれを止める役の桃塚がぼんやりしているため、代わりに副生徒会長の赤神淳^{じゅん}が橙を制す。橙は即座に反応してその場に座り込んだ。

ヴァインセントの頼み、もとい命令を受けて、生徒会メンバーは放課後、桜子の勉強を見ている。主に緑橋と桃塚が桜子の勉強をみて、赤神と黒巢は生徒会の仕事をしていた。

しかし桃塚は心ここにあらず。そして生徒会書記の緑橋ルイはというと、先程からため息ばかりついていた。そんなやる気のない二人の様子を気にした素振りもなく、桜子は頭を抱えて嘆く。

「うわあん！ ネレンとの時間が全然ないよお！ ネレンパワーが足りないよお！」

「ネレンパワーってなんだ」

ぐしゃぐしゃと髪を掻き乱す桜子に、床に正座する橙がツツコミを入れる。

桜子の口から出た名前に反応して、桃塚と緑橋も桜子を見た。

「テストが終わったらいっぱいネレンに構ってもらおうと思っていたのに……！ テストがあとしとネレンを引き裂くう！」

「自業自得だろー」

勉強を疎かにしていた桜子の自業自得だと生徒会庶務の黒巢漆は淡々と言って、目の前の仕事を片付けていく。桜子は言い返す余裕もないのか、頭を抱えて呻^{うめ}くだけ。

「つーか、なんで無愛想びに教わらねえんだよ。満点はつかとってたじゃん」

「うん……音恋ちゃん凄いいね。六教科満点なんだってね？」

「化け物っすね」

橙の呟きに桃塚がそう返すと、橙がすかさず言った。

「あつ！ 赤神先輩、一位おめでとうございます！」

「そういえば淳、珍しく本気だったね」

橙が思い出したように人懐っこい笑顔で言くと、桃塚も赤神に顔を向けた。

「……別に。ただいつもより勉強する時間があつただけだ」

「ふーん」

赤神は顔を上げないまま素っ気なく返す。会長の座を責任とともに桃塚へ押し付けた赤神は、桃塚の顔を立てることが多い。桃塚自身はそんなことは望んでいないが、珍しいと思った。その会話を耳にしていた緑橋は、教科書をきゅっと握って、情けなく歪んだ顔を隠す。

「うああんっ！ ネレンに会いたいっ！」

長い髪を激しく乱して机に突っ伏す桜子から薔薇のような甘い香りがして、緑橋はそちらへ顔を向けた。

「この甘い匂いは……？」

「ん？ ああ、ヘアーコロンのよ」

と桜子は答える。

「あ、ルイ君は僕達みたいな嗅覚がないからわからないか。桜子ちゃんはこのヘアーコロンの毎日つけてるよ」

桃塚は緑橋に笑いかけると、桜子に視線を向ける。桜子はコクコクと頷く。

「ネレンがね、このヘアーコロンのほんのり甘い香りが好きなんだって」

「へー、そうなんだ」

いつもの調子で桜子が音恋の話を持ち出して桃塚と談笑を始めたかと思いきや、二人はそろって俯き、ため息を吐いた。

「ネレンとの時間がほしい……」

桜子は憂いのある表情でぼやく。

同じく、と言いたい桃塚は、このところ朝食の時間をずらされて音恋の顔すら見ていない。どうやら桃塚は避けられているようだ。しかし、音恋から避けられる理由が思い当たらない。

「はあ、ほんと理解できねえ」

そこで大きなため息を吐いたのは、橙だった。

「あんな笑わない女のどこが良いんだよ」

「失礼な！ ネレンはちゃんと笑うよ!!」

「え!? 笑うの!？」

桜子の発言に、桃塚がガタンと席から立ち上がる。桃塚以外にも赤神と緑橋が驚いたような顔を桜子に向ける。

そんな中、ただ一人黒巢だけが、中間試験中に後回しにしていた仕事を黙々とこなしている。

「え、笑いますよ。人間なもの」

「それ、僕達への嫌味と受けとっていいかな？」

「あ、そうじゃなくって！」

生徒会メンバーの正体がモンスターであることを、桜子は知っている。苦笑いを浮かべる桃塚に、慌てて桜子は訂正した。

「ほら、人間笑うと寿命が伸びるって言うから！ ネレン笑いますよ。あたしと二人っきりの時とか！ お泊まりの時なんて満面ですからっ！」

桜子はどーんと胸を張って自慢した。

「そ、そうだったんだ……。僕でつきり、トラウマかなにかで笑えなくなったのかと思ってた……。満面か……」

「え、あの無表情は生まれつきじゃないんすか？」

そうボケる橙に桃塚は乾いた笑いしか返せなかった。

「やだなあ、トラウマだったらあたしが最善を尽くして笑わせてますよ！」

豪快に笑う桜子を桃塚はじっと見た。桜子と一緒になら、音恋は笑う。音恋の笑顔が見てみたい。

「ねえ、桜子ちゃん。音恋ちゃんも勉強に誘ったらどうかな？ そうしたら一緒に居られるでしょう？」

びく、と緑橋が肩を上げた。しかし桜子の反応は微妙だ。

「ヴァインセント先生が、ネレンに迷惑かけちゃだめだって……」

桜子はしゅんとして俯く。ヴァインセントの名前に、黒巢以外が顔を歪ませた。

先日、生徒会メンバーにも音恋がヴァインセントの正体を知ったと報告があった。本人は深入りを望まないため、ヴァインセントの正体以外は教えないように、と学園関係者によって決められ生徒会にも通達がきている。

胸を擦りながら桃塚は別の提案をした。

「じゃあランチ——お昼に誘わない？ みんなで一緒に食堂で食べようよ」

桃塚の提案に桜子は大きな目を輝かせる。桃塚の隣で、赤神は目を丸めた。

昼休みはヴァインセントが音恋と昼食を楽しんでいると知っているのに、そんな誘いをしたらどうなるか目に見えている。何を考えているんだ、と赤神は怪訝そうに友人を見た。実は後先を考えていない提案だったのだが。

「いいんですか？」

「無愛想ちびは来ねーだろ」

と正座に疲れて床の上で胡座をかく橙が斬って捨てる。

「生徒会に興味もねーんだし、来ないだろ。どっちかってゆーと、担任の方に興味あるみてーじゃん」

ぶつきらばうに言う橙をきょとんと見下ろした桜子は、首を横に振った。

「そんなことないですよ。ネレンは赤神先輩の声が好きだって言っていましたもん」

「はっ？ 俺の声？」

仕事に向かっていた赤神が、即座に反応して目を見開く。桜子は赤神に顔を向けるとコクンと頷いた。

「はい。ネレン、声フェチみたいで、生徒会に興味あるかって訊いたら、赤神先輩の声が好きだって言っていましたよ」

さらに、と悪気なく、桜子は笑顔で音恋の情報を披露する。

「へえ……音恋ちゃん、声フェチだったんだ……」

相槌を打つ桃塚の胸の中がもやもやに支配されていき、表情が曇る。

「……ふーん？ 俺の声、がね」

やけに笑いが含まれた赤神の声に桃塚が振り返ると、赤神はニヤリと不敵な笑みを浮かべていた。その表情を見た途端、桃塚はぞわっと、なにかとてつもなく嫌な予感に襲われた。

「そ、その笑みはなに？ 淳？」

「ん？ 別に？」

「別に、とは思えないよ!」

嘘臭いほどキラキラした笑顔を向ける赤神に、桃塚は問い詰める。

「いいから星司は桜子の勉強を見てやれ」

そう言っただけで、さながら笑顔を浮かべる赤神に、緑橋も不安を覚える。しかし彼は、ただ静かにため息を零したただけだった。

そんな緑橋を横目で見た黒巢は、何も言うことなく淡々と仕事を片付けていく。

桜子の口からは、そのあとも音恋の情報が漏れ続けたのだった。

五話 親友に報告　　（緑橋ルイ）

掲示板に張り出されていた中間試験の順位表が、ある日なくなっていた。一週間張り出されていると聞いていたから変だと思いつつ、ぼくは内心安堵していた。あの順位はもう見たくない。

ぼくは掲示板の前を横切り、手にした本を返すために図書室へ向かった。

二時限目の休み時間。誰も利用していない薄暗い図書室を見渡す。ここで宮崎さんと交わした会話を思い出して、たちまち落ち込む。せっかく応援してもらったのに、宮崎さんに合わせる顔がない。気付けばため息が漏れていた。

俯きながらカウンターの行き、返却の手続きを済ませる。それから本を棚に戻していく。しゃがんで、一番下の段に本を押し込んだ。

「……はあ」

宮崎さんが、ヴァインセント先生の正体を知った。いつかはそうなると薄々気付いていたけれど、実際に吸血鬼だと知ってもなお、宮崎さんがあの人という事実がどうしようもなく重く心にのし掛かった……

魅惑的な容姿の吸血鬼。人間に限りなく近く、恐ろしくも美しいモンスター。彼女がそのモンスターと、怖がる素振りも見せず一緒に昼食をとる光景を見た。

宮崎さんも、吸血鬼を好きになるのだろうか。そんな思考がぐるぐると巡る。

比べてはいけないとわかつてはいても、比べずにはいられない。ヴァインセントさんは美しい吸血鬼。でもぼくは、醜い姿の怪物。

もし彼女がぼくの正体を見たら、今まで通りなんて、きつと叶わない。ぼく達のことは怖くないと言った姫宮さんだっけ、ぼくの正体を見ればきつと悲鳴を上げる。

宮崎さんだっけ、もう二度とあの黒曜石の瞳で、ぼくを見てくれなくなる。

そう思うと、胸の奥がギュッと掴まれたように痛くなった。

変わろうと思ったけれど、足がすくんだ。

顔を上げたくない。上げられない。

ぼくはだめかもしれない……

っん、っん。

前髪と一緒に額を押さえていたら背中中に違和感がした。指先で押されるような感覚に、顔を上げ

て振り返る。

「わっ」

「うわあ!？」

いきなり視界に宮崎さんがドアップで現れた。驚いて悲鳴を上げたぼくは、目の前の本棚に勢いよく衝突する。その衝撃で本棚から本が飛び出して、ぼくと宮崎さんの上に落ちてきた。咄嗟にぼくは宮崎さんを守ろうと立ち上がったけれど、後頭部に分厚い本の角が直撃してそのまま倒れてしまった。

ドタダダダン！

背中に無数の本が落ちてきた。いくらモンスターの身体が丈夫でも、すっごく痛い。

「うっ……」

あまりの痛さに、すぐには起き上がれない。床に額をついて呻いていたら、嗅いだことのない匂いが鼻を擦った。

目を開くと黒い髪。これは彼女の髪の匂いだと理解した。ほのかにシャンプーらしき甘い香りがある。

ああ、薔薇のコロンより、こっちの方がぼくは好きだ。落ち着いていて、宮崎さんらしい。

「緑橋くん」

静かな声が、やけに近くから聞こえた。そちらを向けば、宮崎さんの瞳とバッチリ目が合った。さつきよりも近い。それもそのはず。ぼくは宮崎さんの上に倒れていたのだ。ぼくの真下に、長い

黒髪を床に散らした宮崎さんが横たわっている。

「大丈夫？」

「ううわああ!! ごめつ、ぶっ！」

慌てて上から飛び退いたら、また本棚に頭をぶつけてしまった。

大丈夫？ と起き上がった宮崎さんがもう一度問う。

「ごめんっ！ 本当にごめんなさい！ わざとじゃ……け、怪我は!？」

「緑橋くんが庇<>かばってくれたから私は無傷だけど……緑橋くんは大丈夫？」

「ぼ、ぼくは見た目より丈夫だから……」

まるで押し倒されたようになったことをまったく気にしていないのか、宮崎さんは表情を変えないままぼくを見る。一瞬とはいえ密着した身体の感触が残っていて、いたたまれない。

「驚かせてごめんね？ 緑橋くんが見えたから追いかけてきたの」

「え？」

乱れた髪を直しながら、ぼくの目の前に座り込む宮崎さんの言葉に目を丸めた。

ぼくを追いかけてきた？ なんて？

「緑橋くんの順位」

油断したところに、いきなりグサリときたから思わず胸を押さえる。

「調子でも悪かったの？ 緑橋くん。中等部の成績から比べると下がったよね……何かあったの？」
じわじわと罪悪感が込み上げてきて、ぼくの胸の中を気持ち悪くさせていく。

「ただ、ちょっと……勉強不足だったんだっ！　そ、それだけ……そ、それだけだから気にしないで！　心配かけて、ごめんなさい！」

宮崎さんの瞳を見ていられなくて、ギュツと目を閉じる。ぼくは、見たものを石に変えるメデューサなのに、宮崎さんに見られると石になってしまいそうになるんだ。

「そっか……。じゃあ桜子の勉強は桃塚先輩が見ているの？」

「え？　あ、いえ……。ぼくと桃塚先輩とで見えます」

「大丈夫なの？　緑橋くん」

「期末試験が近付いたらさすがに見られないけれど、今は大丈夫です」

床に散らばった本を見つめながら、目の前の宮崎さんに答える。

ぼくの目は彼女からは見えないから、不快感は与えないだろう。

「桜子をよろしくお願いします」

ぼくに頭を下げたのか、宮崎さんの長い黒髪が床についたのが見えた。慌てて首を振る。

本当に仲がいいんだな……。宮崎さんと姫宮さん。

「ところで……。黒巢くんは一緒じゃないの？」

「え？　ナナ？　たぶん教室だと思うけど……」

「ふうん……」

いきなり出てきたナナの名前に、ちらつと宮崎さんの顔を見た。

すでにぼくを見ていなかった彼女は、床に落ちた本を拾い始めている。

「いいよ！　ぼくが落としたんだから、ぼくが！」

「でも授業に間に合わなくなるよ」

「だっ、大丈夫！」

ぼくは宮崎さんの手から本を受け取って、床の本をかき集めた。

「そう……。じゃあお言葉に甘えて、私は先に戻るね」

ぼくの目の前で宮崎さんが立ち上がる。

「えっ？」

本を片付けると言っただけで、先に戻ってと言ったつもりはないかったのに。

まだ。まだ。まだ行かないで。

言葉より先に手が伸びて、宮崎さんの手を掴もうとした。だけれど間に合わなくて空回り。伸ばした右手の甲に、揺れた黒髪が当たった。なめらかな感触に驚いたのとほぼ同時に、宮崎さんが振り返って首を傾^{かし}げてぼくを見下ろす。

「あ、えっと、ええっと！」

引き留める口実が思い浮かばない。そもそもなんで引き留めるんだ。合わせる顔がないって、思っていたのに。その理由を思い出したら、また顔が上げられなくなった。

「緑橋くん？」

優しく包み込むような声でぼくを呼ぶ宮崎さんに、弱音を吐きなくなった。

それをしたらきつと、呆れられてしまうかもしれない。でも、言わずにいらなかった。

「……宮崎さんには……羨ましく思う人が、いたんだよね？　それは、どんな人？」

ぼくに同族意識を持つてると言った彼女なら、どうしても他人と比べてしまうこの気持ちをわかってくれる。そんな期待を抱いて、ぼくは問いかける。

宮崎さんは静かにその場にしゃがむと、頷いた。

「たくさんの人を羨ましく思ったけれど、一番羨ましく思った人は……凄くキラキラした人。私とは正反対の活発で天真爛漫な子」

そう言われて頭に浮かんできたのは、眩しいくらい明るい姫宮さん。

宮崎さんが羨ましく思う人は、姫宮さん？

「その人と自分を、比べる……？」

「うん、自分との違いを……よく思い知るよ」

「じゃ、じゃあ！」

ぼくが顔を上げた瞬間。

「思い知るたび、自分は自分だつて改めて思うんだ。彼女は憧れの人だけれど、なりたい人じゃなくて……親友として、そばにいたい人なんだ」

黒曜石の瞳がぼくを真つ直ぐに射抜いた。期待が打ち碎かれる。

そうだ。宮崎さんは同族意識を持つてると同時に、嫌悪感も抱いていると言った。

ぼくと違って、宮崎さんは自分を否定してない。ぼくとは違う。

言えない。言ったら、失望される。

ぼくは何も言えなくなって、俯いた。

宮崎さんと出会って、ぼくは変わろうと思った。立ち上がろうとしたんだ。

でも、どんなに頑張っても、ぼくはあの人に敵わない。

どう足掻いても、ぼくは醜いモンスターだ。その事実を変えることはできない。

ぼくは、自分を好きになれない。宮崎さんと違って自分が大嫌いだ。

「緑橋くん」

床を見つめていた視界に、白くて小さな手が入ってきた。ぼくに向かって伸ばされた人差し指がどンドン近付いてきて、ぼくの額に当てられた。そしてその指に顔を押し上げられる。

「今日は俯いてばかりいるね。ゆっくり変わるのでしょ？　まずは人と目を合わせることに慣れなきゃ」

ぼくの視界に、宮崎さんの顔が映る。黒曜石の瞳がぼくを射抜くように見るから、また動けなくなった。

あの時と一緒だ。ゆっくり頑張ってください、と言ってくれた時と同じ。

今にも微笑みそうな柔らかい表情と優しい声。

固まって動けなくなったぼくの体温が上がっていく。熱くなって、それから泣きたくなった。

彼女は隠れてるぼくを、見てくれている。ちゃんと、ぼく自身を見てくれる人。

君はぼくの正体を知っても、変わらずに見てくれる？

その表情でその瞳で、変わらずぼくを見てくれる？

見てくれたなら、ぼくは——ぼくは変わる。

「あ、もう行かないや。じゃあね」

「あっ……」

ふいっと彼女の視線が外れた。宮崎さんはしなやかな髪を靡かせて、図書室を出て行ってしまった。だけどぼくは、追いかけることができなかった。

熱が引いてきて、さっき思った言葉の意味を理解する。

え？　ぼくは……？

カラカラカラと、いきなり聞こえてきた物音に飛び上がる。宮崎さんが出て行ったドアとは逆側にある窓を、一羽の鴉が器用からずに嘴くちばしで開けて入ってきた。

「どうしたの？　ナナ」

「……べつにー」

くぐもったナナの声が返ってくる。首を傾かしげつつも、授業が始まる前に本を片付けようと散らばった本を集め始める。そうしたら、人間の姿に戻ったナナが手伝ってくれた。

「いいよ、教室に戻らないと遅刻するよ」

「どうせ遅刻だ」

ナナの言葉と同時に、予鈴が聞こえてきた。確かに遅刻決定だ。

いつもなに考えているかわからないけど、こういう優しいところがある。ナナとは中等部からの付き合いで、それからずっと一緒だけど、親友と呼べるのかな。宮崎さんは姫宮さんに憧れを抱い

ていて、親友同士。

ぼくは、空っぽになった本棚に拾った本を並べるナナをじっと見てみた。

「……ナナには憧れを抱かないな」

「喧嘩売ってんなら、もう一回本を落とすぞ」

ナナはそう言いながら、ぼくの頭に本を一冊落とした。痛い……

「……ナナ」

「まだ懲こりないなら、これまとめて落とす」

相当頭こにきたのか、ナナは両手に抱えた本を掲げて見せた。

「怒るなよ？　……ぼく達って親友同士だよね」

「……」

本当のぼくを見てくれるもう一人。ぼくを見捨てないでくれる優しい友だち。

目を丸めたナナはそっぽを向いた。

「……知ーらね」

素っ気なく返されたけれど、笑みを浮かべた横顔がちゃんと見えたから、ぼくも笑う。

「親友に報告」

「は？　報告？　なに？」

「好きな人ができた」

こんな報告、ナナにしかできない。

どんな反応するか気になったけれど、恥ずかしかったので今度はぼくがそっぽを向いた。ガタン！

真横に本が落下してきたから、驚いてナナに視線を向けてみれば、もつと驚いた顔で絶句していた。

どうしたのか、問おうとしたら胸ぐらを掴まれる。

「なに自覚してんだよ！ 撤回しろ!!」

「ええっ!？」

意味のわからないナナの怒鳴り声が、ただ図書室に響いた。

六話 赤く染まる 〱 赤神淳〱

吸血鬼は、傲慢なモンスターだ。自分は最強だと傲り、人間や他のモンスターを見下す王様気取りの連中。

年に二回開催される吸血鬼の夜会に参加するたび、俺は見下すような視線を向けられてきた。

父は吸血鬼、母は人間。吸血鬼のハーフである俺は同族から忌み嫌われている。それでも俺は毎年夜会に参加し続けた。参加しなければ自分を否定したも同然になる。俺は、両親を誇りに思っているし、二人の子どもに生まれて幸せだと思っている。だからこそ、どんな目で見られても俺は父親とともに、なんでもない顔をして参加した。

その日、高級ホテルの広間で開かれた夜会の主な話題は、あの男についてのものだった。

「ヴァインセント様が、あの学園で教員を務めているのですって？」

「また人間に夢中になっているのかしら？」

「これ以上紛い物が増えられては困る」

ヴァインセント本人が参加していないからか、着飾った吸血鬼達は言いたい放題だった。

「否、前回」と同じ結果になるだろう」

ヴァインセントは三十年前も、人間の女性を愛した。漆黒鴉学園に通っていたハンターの娘と愛し合った、と聞いている。しかし吸血鬼とハンターが、結ばれることは許されない。詳しくは知らないが、結果的に悲劇が起きてハンターの娘が死んだらしい。

ヴァインセントが今夢中になっている人間、宮崎音恋はヴァインセントの正体が吸血鬼だと知っても今までの態度を変えてはいない。しかし、彼の想いを受け入れたわけではないようだった。彼女は靡かない。いくらヴァインセントと言えど簡単には落とせないだろう。そう考えていたら……

「死んだ娘の一族は、今もヴァインセントを目の敵にしていると聞く。再び同じ悲劇が起きる可能性は十分にあるのではないか？」

とある吸血鬼が口を開く。

ヴァインセントを狙うハンターがいる？ 動揺を表に出さないように注意しながら、その会話に耳を澄ませる。

「もう一度お気に入りの人間が殺されれば、ヴァインセント様も正気に戻るでしょうね」

「ハンターを皆殺しにするだろうな。その際にはぜひ手を貸そう」

クスクスとお上品ぶって笑う吸血鬼。

こんな話、ヴァインセントがいる前では決してしないだろう。俺は顔をしかめた。彼は吸血鬼の中でも特に強い。そんなヴァインセントに面と向かって何か言える者などこの場には誰一人としていなかった。それどころか、今話しているような、彼女が死んだあとの話なんてものが彼の耳に入ったら、言った者はその場で首を切り落とされかねない。

しかし、そんなことよりもだ。

ヴァインセントが宮崎音恋ということで、彼女が殺されるかもしれない。

その可能性に俺は大きな衝撃を受けていた。

翌日登校してからも、頭の中にこびりついたかのように、昨日聞いた話が消えなかった。いっそ、モンスター関連の懸案事項として星司に相談してしまおうかとも考えたが、放課後になっても伝えることを躊躇している。そして、そんな風に躊躇している自分に苛立ちが募った。さらには、姫宮桜子が生徒会室で宮崎音恋の名を繰り返し口に出すから、苛立ちはますます倍増する。

仕方なく一人で生徒会室を出て、人の少ない静かな中庭に行く。校舎の壁に寄りかかって座り、気を静めるように息を吐いた。

まずはヴァインセントを目の敵にしているというハンター一族の名を調べた方がいいだろうか。自然と浮かんだ考えに、いや、なんで俺がそこまでしなければならないんだ、と即座に否定する。

俺には、なんのメリットもない。懸案事項として報告し、いつも通り星司達に押し付ければいい。宮崎音恋は、俺にとって苛つく存在ではない。自分の思い通りにならない女性。

俺は俺自身の利益のためだけに動く。彼女のために、俺が何かをする必要はない。なんのメリットもない。なのに、何故だ。

「……………」

顔を上げ青く澄んだ空を見上げる。一年の時から、何かあるたびにここを利用している。この場所、来る人も少なく学園の中で唯一気が休まる場所だった。

中庭を気持ちの良い風が吹き抜け、真っ直ぐな赤い髪を揺らしていく。

俯いて、考える。

もし、本格的に情報を集めるとしたら、同族にも話を聞かなくてはならない。中世の西洋貴族風に着飾った吸血鬼どもの上品ぶった笑い声を思い出して、不快になった。

その時、こちらへ近付いてくる足音に気付く。地面を映していた視界に、小さな上履きが入る。

途端に彼女の香りが鼻に届いた。

驚いて顔を上げれば、そこには宮崎音恋がいた。まさか、彼女の方から俺に近寄ってくるとは思わなかった。

彼女は俺の目の前でスカートを押さえてしゃがむと、じっと顔を覗き込んできた。

何を考えているのか、相変わらず無表情の彼女から、その思考は読みとれない。

お互いに無言で見つめ合っていると、宮崎音恋がおもむろに左手を上げ、その手を俺の頭の上に

置く。それをゆっくり動かして、俺の頭を撫でた。

「……何をしてる？」

「落ち込んでいるように見えたので、慰めてます」

俺をバカにしているのだろうか。そう思ったが、怒ることはできなかった。

髪を整えるように、控え目に撫でてくる小さな掌。そこから伝わる体温に、今まで感じていた苛立ちが不思議とおさまっていく。音恋はなにも言わず俺の頭を撫で続けた。

本当に、この人間はなんなんだ。

思い通りにならず、いつも苛立たせるくせに、何故こうも穏やかな気持ちを与えてくるんだ。戸惑いながらも、俺はその心地いい感触に身を任せる。

しかし心地よく頭を撫でる手が、次第に動きを遅くして、やがて撫でることを止めてしまった。

俺はその手が離れてしまう前に、音恋の細い手首を掴む。

「隣に座れ」

考えるよりも先に、口から言葉が出た。

「いえ、もう帰ります」

そう言っただけ立ち上がりとする音恋を軽く引く張る。

そっと引き寄せるつもりだったが、音恋はよるめいて倒れ込むように俺の右に座った。ふわりと舞い上がった髪から、彼女の匂いが辺りに広がる。それを静かに吸い込みながら、俺は彼女の左手を放す。

「慰めるならちゃんと慰める」

「……」

落ち込んではいないが、勘違いしているらしい音恋をそう言っただけ引き留める。視界の端で音恋が壁に寄って、俺から距離を取る様子が見えた。俺と壁の僅かな間に座ったのだから、大した距離なんて取れるわけではない。

音恋に目を向ければ、顔を逸らされた。

そのまま音恋の横顔を見ていると、中庭に向いた彼女の大きな黒い瞳が見開かれる。

「ここ、素敵ですね。落ち着きます」

「……一年だから、初めてか」

「はい、初めて来ました」

彼女は、目の前の景色を見つめている。

俺はもう見慣れたが、ここから見える中庭と学園の景色は新鮮に映るだろう。

音恋は少し沈黙したあと、思い出したように言った。

「赤神先輩、中間試験一位でしたね。おめでとうございます」

「ほぼパーフェクトのアンタに言われると嫌味に聞こえる」

同じ一位でも、総合点は音恋が上だ。俺が六八二点なのに対して、音恋は六九八点。順位表を見て心底驚いた。試験勉強であれだけケアレスミスをしていた人間が、まさかあんな高得点で学年一位になるなんて予想外だった。それとも俺が見た時だけ不調だったのか。

「もしかして、二点減点した教科は……数学か？」

「はい。パーフェクトを狙ったのですが……ケアレスミスで逃しました」

「……ふーん」

俺に教えられずとも、自分でできたってわけか。

「あの時はミスばかりしていたのに、相当勉強したのか？」

「この前は笑われましたが、頭はいい方です」

「……」

足を抱えて俺の隣に座っていた音恋が、背筋を伸ばして胸を張った。

それにカチンときた。なんだその誇らしげな態度は。赤点を取ると決め付けてた俺への当てつけか。

そこで、あることを思い出す。桜子が生徒会室で言っていたこと。

俺は笑みを浮かべて、音恋に顔を向けた。

何かを感じ取ったように、音恋が微かに肩を震わせる。警戒して逃げられる前に、俺は左右の手を壁について音恋を両腕の中に閉じ込めた。

「一位を取ったご褒美をやる」

笑顔でそう言うと、音恋は身を固くして、こちらを窺うような顔をする。

彼女のしなやかな髪を右手で取り、左耳にかける。そのまま輪郭をなぞり、顎を掴む。

俺のその行動にばかりと瞬きをする音恋の顔を、中庭の方へ向かせた。露わになった小さな左

耳に顔を近づけて囁く。

「アンタ、俺の声が好きなんだって？」

「……」

音恋の左耳に息を吹きかけるように囁くと、彼女は目に見えて動揺した。桜子からそれを聞いた時は、機会があったら耳に囁いてやろうと思っていたが、これはいい。音恋は俺の声が好きらしい。俺の電話を二度も無視した理由も、俺の声に弱いからだと思うと堪らなく気分がいい。

「ご褒美で好きなだけ囁いてやる。どんな言葉がいい？ なんでも言ってる」

「い、いい、です……放してください」

音恋は頭を左右に振って俺の手から逃れようともがくが、俺がこの好機を逃すわけないだろう？

「音恋」

そっと甘く彼女の名前を囁く。びく、と腕の中で音恋が震えた。

「どんな言葉がいい？」

彼女の小さな耳に唇を近付けて、優しく囁く。

「どんな言葉が欲しい？」

音恋は顔をきつく閉じ、震えながら俺の袖を握り締めている。黒い髪が引き立てる病的なまでに白い頬が、ほんのりと赤く染まった。

本当に俺の声に弱いようだ。普段は憎らしいほど冷静沈着な音恋が、面白いほど取り乱していく。その様子に嗜虐心が擦られ、口元が緩む。いつにない彼女の様子を間近で眺めながら、俺は囁き続

ける。

「努力したご褒美をやるから」

「いりません……やめてください」

音恋にさつきまでの威勢はなく、か細く高い声は弱々しい。それでも、なんとか俺の腕から逃れようとする。

その弱い抵抗が、また俺の胸を擦った。

「音恋」

「やめて、先輩っ……」

「くくっ……」

「っ！」

つい堪えきれず耳元で笑うと、びくりと震えた音恋が壁へと仰け反った。

「なんだよ？ 俺の笑った声がいいのか？」

「んっ……！」

完全に俺と壁に挟まれた音恋の耳に、もう一度息を吹きかけながら囁くと彼女は声を漏らした。

「……ふーん？」

唇をキュッと閉じて俯く顔は、耳まで赤くなっている。その愛らしい顔を眺めながら、顔を寄せ、彼女の首筋と髪から香る匂いを吸い込む。シャンプーの香りと、彼女自身のほのかな甘い香り。

「そんなに俺の声が好きなのか」

